

「はじめよう！がんの家族教室」第三部補講

【群像、あるいはティーンエイジャーのためのハレルヤ】（カズイ スチカ 著）より

信仰心あつい子どもの物語は、どれも嘘になりやすい。

F・オコナー、一九六九

## 第一章 星たちの失敗

堀川の左岸、瓶屋橋を渡ったところで、母は私を待っていた。金曜の午後は部活がないから、三時には私がここを通ると見越していたのだ。これまでも、何回かあった。たいてい母がピンチの時。実際、母は今日、がんセンターへ行っていた。

「どうだった？」

「うん。乳がんって言われたわ。」

「えっ……」母の答えはあまりにあっさりしていた。

「でね、急な話で悪いんだけど、あんた、これから、がんセンターに行ってくれない？ 『親ががんになった子どもたちの勉強会』っていうのがあって、担当の先生があんたにも来て欲しいんだって。」私は混乱した。

「ちょっと、待ってよ！ なんて患者でもない私が、そんなところ行かなきゃなんなの？ しかも母さんががんって言われた、その日に。」こんな展開、私は全然予想してなかった。

「それはさ……先生に訊きなさいよ。きっと、がんの治療には家族の協力が必要だからって言うと思うわよ。」たしかにそうだ。

「でも、勉強会とかって、普通、子どもの病気について親が話し合ったりするんじゃないの？ これじゃ話が逆じゃん！」

「もう、四の五の言わないの。これ、パンフレット。地図もそこに載ってる。日比野から地下鉄に乗って、金山で環状線に乗り換えたら、自由ヶ丘で下りる。四時からだから、余裕。スクバは私が持って帰っとく。夕飯はあんたの好きな油淋鶏だよ。はい、行っといで。」

親ががんになった子どもたちの勉強会に、私はこんなふうにして送り出された。母の突然の頼み事とか指示には慣れてたけど、さすがに、今回のはちょっときつかった。夕飯に油淋鶏と言われても全然嬉しくなかった。私は作り笑いで、母から離れた。金

山で乗り換えたところまでは覚えているけど、あとはずっとあたまの中で「がん」という言葉と「死」という言葉が入れ替わるだけだった。そのうち、いろんな疑問が湧いてきた。乳がんってどのくらいの人が生き残るの？ 手術したら、胸は本当になくなるの？ 母も抗がん剤で髪の毛が抜けるのかな？ 他にどんな副作用があるの？ ストレスがたまって、母はがんになったんだろうか？ がんって遺伝するの？ 日本人の死亡原因の一位ががんだって、保健で習ったけど、それだけ。新聞でがんを取り上げた記事を見ても、なんだか難しそうで、飛ばした。もっとちゃんと読んでおけばよかったかな。私、がんのこと、何も知らない。

自由ヶ丘のアナウンスが聞こえたのは奇跡だ。地下鉄の駅の東口を出ると、がんセンターはすぐそこに見えた。近代的な九階建ての建物。玄関に入ると、アトリウムが上の方までスーッと伸びていた。壁には本がズラッと並んでいる。「貸し出し文庫」と書かれた所で、エプロン姿の人たちが手際良く働いている。

勉強会があるのは、二階の緩和ケアセンターというところだ。階段を上がって、三階へのエスカレーターを通り過ぎると、緩和ケアセンターの標識が見えた。右に入ると、相談室Aがあった。丸いテーブルにオレンジ色の椅子がきっちり十脚並んでいた。そして、そこにはもう、四、五人の中高生が座っていた。でも、誰も一言も話していなかった。私は、手持ち無沙汰で、母の渡してくれた紙袋を開けてみた。中には、勉強会の日程や講義内容について書いたお知らせ、そして一冊の本が入っていた。『さよならを待つふたりのために』。ジョン・グリーン？ 聞いたことのない作家だ。本の裏にはこんな説明があった。「ヘイゼルは十六歳の少女。甲状腺がんが肺に転移して以来、もう三年も酸素ボンベが手放せない生活。骨肉腫で片脚を失った少年オーガスタスと出会い、互いにひかれあうが・・・」。小児がんの子どもたちのサポートグループの物語。サポートグループって何？ もしかして私が百パーセントがんになるってこと？ 今からその準備で、こんな本、読まなくちゃいけないの？ まさか。でも、もしそうでないなら、親ががんになると、子どもの生活がどんどん変わっていつてしまうということなの？ 本を開くと、冒頭は主人公ヘイゼルのつぶやきだった。

「がんのパンフやサイトには必ずこう書かれている。気がめいるのはがんの副作用のひとつである。でも本当は、気がめいるのはがんの副作用じゃない。死の副作用だ。（がんも死の副作用のひとつだ。ほとんどなんだったってそう。）」

気がめいるのは、がんの副作用にみえるけど、実は死の副作用。私は、これにすっかり気がめいった。母が死ぬことの副作用なの？ 死ぬことの副作用・・・次の文字を読んでいくのが怖くなってきた。すべてが死につながっていくみたい。顔を上げると、長い白衣を来た中年の医者と、母よりすこし若い看護師がテーブルの向こうにい

た。やさしそうな人たちに見えたけど、私の頭の中は、死の言葉の連続であふれそうだった。

「こんにちは。」看護師がやさしく言った。

「今日は、がんを抱えた親をもつ中高生に集まってもらいました。親御さんからおおまかな話は聞いているかな？ みんながこの場所を気に入ってくれて、これから来年の二月まで、毎月第三金曜の午後に、一緒に勉強できればと思います。私は、このプログラムの責任者で看護師のオサナイズクです。名字は、長く内側、シズクは雨に下と書きます。それからもうひとり、今日は、ゲストで精神科医のコバヤシマサヤス先生に来てもらいました。小さな林で、正しく健康。じゃ、とりあえず自己紹介から始めましょうか。内容は自由だけど、名前の由来か、名前にまつわるエピソードを聞かせてくれるとうれしいな。誰からいく？ えーっと。」そこで、なぜか長内さんと私の目が合った。

「じゃあ、あなた。いい？ 今、目が合った。」気分はかなり落ち込んでいて、はっきり言って最悪の状況だった。でも、こういうことはさっさと終わらせたいから、「はい」と言って、話し始めた。

「私は、ついさっき、学校帰りに、お母さんからここへ来るように言われました。お母さんは今日、乳がんが診断されたばかりです。詳しいことは何も聞いていません。年は中二です。名前は、タバタメグミ。漢字はみなさんの想像通り。田んぼと畑に、恵み。友達は私のことをグミと呼びます。あだ名はかなり気に入っているの、みなさんもグミと呼んでくれると嬉しいです。」

「はい、グミですね。」

「ひとつ訊いていいですか？」私は長内さんに訊ねた。

「なに？」

「どうして私は、ここに来るように選ばれたのですか？」

「グミは、お母さんの希望です。院内に貼ってあった参加者募集のポスターをごらんになって、私に連絡して来られたのよ。対象年齢はぴったりだったし、今日の今日だったから即決したの。」担当の先生の指示じゃなかった！ もしも母が余命わずかかで、娘がショックを受けないようになって話だったらどうしようかと思った。

「はい。じゃあ、次は・・・時計回りで行こうか。」長内さんの接し方は悪くない。子どもだと思って媚びるでもなく、かといって大人の上から目線でもない。背も高くてパンツルックの長内さんは仕事もテキパキできそうな感じがした。長い髪をお団子に結っている。美人で、独身って雰囲気。カッコイイ。

「僕は、こんなとこ、来たくはなかったんです。なんか、可哀想な子どもの見本みたいで。変に同情されるんじゃないとか、医者や看護師の研究対象になるだけじゃないかって。病院って、そもそも辛気くさいし。特に、がんセンターだから、死ぬのを

待ってる人も多いんでしょ？ でも、母親が真顔で言ったんです。『お願い』って。なんか、あの目見たら、いやだとは言えなくなっちゃって。もしかしたらこれが最後の親孝行かもしれないと思って来ました。名前はアオヤマスナオです。名字は普通だけど、スナオはたいていジュンと読み間違えられる。どっちかという、その方がいいけど。僕も中二です。」変な奴。名前はスナオでも、本人、キツすぎる。あだ名はアオジュンでいいや。制服からすると、市内の公立中学だ。

「クロダサエコです。私は、がん患者の子どもとしては、ある意味、プロの域に達していると思います。父が急性骨髄性白血病を発症して、今年で十年になります。父は大学教授で、治療の合間を縫って、学生を教えています。母も予備校の講師をしていて、だからか、たいていのことは、ひとりでやります。高三なので、来年は名古屋を出るつもりです。国公立の医学部で奨学金をもらおうと思っています。臨床心理学にも興味があります。親のがんが子どもにどんな影響を与えるかが、私のライフワークだからです。このグループへの参加は、私のためというよりも、スタッフのためになるかと思って来ました。」すごい。なんだか近寄りがたいオーラがある。だけど、ちょっと懂れる。スラッとしていて、長い髪はポニーテールにして、ボルドーの眼鏡が色白の顔によく似合っている。制服は星ヶ丘の市立高校。やっぱり、頭いいんだ。

次に話し出したのは、まだ制服が顔になじんでいない、少年という言葉がぴったりな子だった。

「みんなの話、聞いていて、なんかすごいなって思いました。僕の場合、母さんが今、大腸がんで入院しています。三年前に手術したけど、先月、再発して、もう一回手術を受けたあと、化学療法をしています。がんは取り切れたし、薬もよく効いているみたいです。妹はまだ小三で、僕も中一だから、大丈夫かなって心配されるけど、うちには爺ちゃんも婆ちゃんもいて、なんとかやっています。名前は、サトウカナメです。父親が付けたそうです。カナメって、ちょっと古い感じがするけど、『重要』ってよく出て来るし、悪くないと思います。家は岐阜です。」

カナメは見かけによらず、しっかりしているみたいだ。そう思った瞬間だった。

「エーエスピーピー、エーエスピーピー、五階東病棟」。

いきなり院内放送が入った。長内さんと小林先生の顔が一瞬固くなった。

「何ですか、今の」アオジュンが長内さんに訊いた。長内さんは一瞬何かためらうような顔をしたが、話し始めた。

「うん。そうね、みんなには特別に教えます。エーエスピーピーは **As soon as possible** の略。つまり、患者の容態が急に悪化したので、手の空いた医師はできるだけ早くそこへ直行せよ、という指示です。」大きな息をはく音が聞こえた。

「確か、消化器病棟は七階・・・」と、カナメが言った。

「ごめん、母さん、ステージIVだから、つい・・・」

部屋の空気がシーンとなった。私も、つい視線を落とした。カナメの背負っているものの重さを感じた。少しして、小林先生が沈黙を破った。

「ステージⅣってどういうふうに聞いている？」

「だいぶ進んでいるってことだと聞いています。」

「そうかあ。それは、ちょっと間違いだな。」

「どうしてですか？ ステージはⅠからⅣまでしかないって聞きましたけど・・・」

「そこは間違っていないよ。進むってところが違うんだ。がんはね、広がりて分類されているんだ。空間分類なんだよ。でもね、進むって言うと、たいていの方は時間分類だと誤解する。つまり、がん細胞がひとつからだの中にできてから、その人ががんで死ぬまでの時間を四つに分けて、その最後の時期だと思っちゃうんだ。ステージ毎の五年生存率もその数が多いほど低いから、医者でも、時間分類ではないということ意識していない者も多い。でも、ここは重要だよ。どんなに広がっていても、そのがんが、たとえば抗がん剤によく反応するものだったら、全部消えてなくなることだってあるわけだ。時々、『ステージⅣから私は奇跡の生還を果たしました』なんて言う人がいる。確かにそれは稀なことかもしれないけれど、それを奇跡だなんて言うのは、どこかで時間を巻き戻したみたいに思っているわけで、医学的に言えば、間違っている。つまり、がんの分類は、がんと診断された時にかからだの中でどこまでがんが広がっているかで分けられる空間分類なんだ」

「そうなんだ。」カナメはもう一度、大きな息をした。

「じゃあ、俺が最後だな。ササキツトム。名前の由来を訊いたことはない。だいたい、訊いてもそれほど面白い答は返ってこないと思う。俺、ちょっと前までからだ小さくてやせてたからか、軽くみられて、ずっと、ベン、ベンって呼ばれてきた。でも、急に背が伸びて、自分でもびっくりするくらい肩幅もひろくなったからか、ササキ君なんて呼ぶ奴も出てきて、今、変な感じなんだよね。半年前、親父が肺がんと診断されました。全部取り切れたって言うんだけど、本当かなって思う。俺も高三だから、余計な心配かけたくないって親心じゃないのかな。俺は、こう見えても、いろいろマジで考えるんで。なんで親父が肺がんなんかにならなきゃいけないんだとかさ。勉強会のポスター見て、丁度いい機会だと思って、自分で希望して、ここに来ました。よろしく。」ベンは、滅茶イケメンだった。直接、話しかけられたら、絶対ドキドキする。制服は確か、この近くにある仏教系の私学のような気がする。長内さんが続けた。

「今日は五人だけど、あと二人、入会予定があります。勉強会のルールとして、メアド交換は禁止。もしも突然つらいことが起きたりして、誰かに話したくなったら、私に電話すること。それから、勉強会の内容については、他で話さないこと。これは守ってね。でも、手紙なら書けるように住所録は作りました。住所録からはずして欲しい人はいますか？」黒田さんが手を上げた。

「私、受験生なので、それはパスさせてください。」

「わかりました。他には誰かいる？」残りのみんなはオーケーだった。

「昭和の子どもみたいにさせて、ごめんね。じゃあ、小林先生に第一回目の授業をしてもらいましょう。先生、よろしく。」

小林先生はかなりリラックスしている。いつもこんな感じなんだろうか。

「最初だからね、総論から始めよう。つまり、細かいことは後で勉強するとして、基本的に何が大事かってことだ。がんの親を持った君たちが、まず頭に入れておかないといけないことは何か。何だと思う？」黒田さんが即答した。

「親はがんで死ぬかもしれないということですか？」

「うーん、仲々きびしいことを言うんだね。それを頭に入れておくと、どうなる？」

「子どもは現実的になるんじゃないですか。親から見たら、しっかりするというか。だから、親は安心するかもしれませんよね。自覚ができたって。」

「なるほどね、少なくとも君はそうだった。」

「ええ。」

「そうだろうな。でもね、そういうことは僕たちからわざわざ言われなくても、みんな、そう考えるものじゃないかな？」

私は思わず、「はい」と大きな声を出して手を上げた。すると、みんなが笑った。小林先生も笑った。

「ありがとう。でも、手は上げなくていいよ。普通に、話に割って入れればいいんだ。」

「はい。私、今日、がん患者の親をもつ子どもになりたての新米ですけど、最初から、そう思いました。もしかして、お母さんは死ぬのかなって。でも、すぐに、そんなはずないよね、と自分に言い聞かせました。」本当は、今もまだ、そう言い聞かせている最中で、不安で一杯だけど・・・すると、カナメが続けた。

「僕は今もまだ、母さんはがんで死ぬんじゃないかって思っちゃいます。薬は効いても、それでがんが消えるって保証はないし・・・」

「そうだね。たいがい悪い方に考える。がんは治らないんじゃないかとか、もしかしたら、親ががんになったのは、自分がいろいろわがまま言ってストレスかけたからじゃないかとか、考え出したらきりがない。それで、僕が君たちに最初の授業で言いたいのはね、親ががんになったのは、君たちのせいじゃないってことなんだ。とりあえず、がんのほとんどは原因不明だ。原因があって結果があるって、みんなそう考えたがるけど、そんなふうには上手くつながることなんて、世の中にはそれほど多くない。がんもそのひとつだ。グミ、その本、ちょっと上に上げて、みんなに見せてくれる？」今日はよく手を上げる日だ。みんなは、そんな私を見て、また笑った。

「それは、がんになった子どもたちのサポートグループを舞台にした物語だ。君がなぜその本を読んでいるのか、僕は知らないけれど、それはとてもいい本だよ。君ががんでなくても、君がサポートグループに入っていないなくても、それは読む価値のある本だ。実は、僕も、先月、読んだばかりだ。タイトルは『さよならを待つふたりのために』となってるけど、原題は何だった？」私はすぐに表紙カバーを見た。

「The Fault in Our Stars.」

「翻訳のタイトルとはだいぶ違うよね。どんな意味か分る人、いる？」私は黒田さんを見た。

「fault は It's not my fault. の fault だから、責任という意味で、stars は複数だから普通に星じゃなくて、星回りとか運命という意味ですね。直訳すると、『私たちの運命における責任』。」

「さすが優秀な受験生、完璧だ。『星たちの失敗』なんて意味不明な訳はしない。」黒田さんが続けた。

「その言葉は、本の中にも出てきますか？」

「うーん。ネタばれにならないようにしたいけど、これは、シェイクスピアの劇からの引用だ。『ジュリアス・シーザー』で、キャシアスがブルータスにシーザー暗殺をもちかけるときに、こう言うんだ。『ブルータスよ、われらを導く星に罪はない、罪はわれら自身にある』ってね。それで、これをがんに関連づけると、結局、自分ががんになった責任はどこにあるのかという話になる。ところで、もしもその正しい意味をタイトル風にすると、どうなる？」

「こうなった責任は私たちの運命にある」

「そうだね。でも、それだと、わざわざそんなタイトルの本、買って読む人いるかな？ がんを運命として受け入れようというメッセージって、どうだろう？ 登場人物は小児がんの子どもたちだからね、がんになったのは、少なくとも彼ら彼女たちのせいじゃない。たとえば、大人がタバコの吸い過ぎで肺がんになったとか、酒の飲み過ぎで食道がんになったって反省するみたいなことは、子どもたちにはないわけだ。もちろん、子どもががんになったのは、親のせいでもない。ところで、運命って何だと思う？」私が答えた。

「自分たちではどうしようもできないこと」

「なるほど。そう思うよね。たとえば、がんの人は、がんではない人を見て、あの人たちはがんじゃないから、自分のような不幸な運命を背負ってはいないと考える。つまり、がんのない人が自分の人生をすべて自分で決めているように見えるわけだ。でも、実は、それがそうでもないんだよね。世の中の人は誰でも、なんらかの制約の下で生きている。そういう意味では、みんな誰でも運命を生きているわけだ。その本の登場人物たちは、たまたま自分たちの場合、それががんだったと考えることができる。

その中で精一杯自分らしく生きること、それが責任を取ることなんだって。そうすれば、運命の暗さもやわらぐ。タイトルは、『運命にだって責任は取れるんだ』とも訳せるね・・・ああ、これ以上言うと、説教臭くなるな。そろそろ止めよう。でも、まあ、そういうことだ。」長内さんがまとめた。

「小林先生はむつかしいことを、それでもかなり分りやすく話してくれたんじゃないかな。これからの授業でも難しい話が出てくると思うけど、その場で全部理解しようなんて思わないでね。君たちが何かを考えるきっかけになれば、それで十分だと私たちは思っています。じゃあ、今日は終わりますでしょうか。お疲れ。また、来月ね。」

勉強会が終わると、なんだか頭がボーっとした。会自体は悪くなかったけど、一気にいろいろなことが起きた感じがした。がんセンターを出たところで、平和公園一万歩コースの地図看板が目に入った。このまま道なりに坂を下れば、大きな池があって、その淵を歩けば、本山まで行ける。私は、来た道とは違うコースで帰ることにした。池の淵には、ピカピカのマンションが建っていた。ベランダには何本か鯉のぼりが立っていて、赤や黒の鯉が風に吹かれて、気持ち良さそうに泳いでいた。あそこに暮らす家族の子どもたちはまだ幼稚園か小学生なのかな？ どの部屋からもチカチカ光の反射する池の水面とそれを取り囲む大きな樹々が一望できるはずだ。私の住んでる所とは全然違う。ふと目を右に向けると、眼下には、名古屋の街が広がっていた。私は道なりに進み、若葉が出たばかりの巨木の下をゆっくり歩いた。歩いているうちに、すこしだけからだは軽くなったような気がした。